

上の図は、約 1500 年の昔、平安時代の日本の貴族住宅の間取りと立面図です。

ここに、現代の日本の住宅にも残っているエコの工夫があるのわかりますか？



平安時代のころから、日本の住宅には、壁は最小限必要な所、寝室や居間にしかありませんでした。この最古の住宅は、その外側のひさしで覆われた、廊下のような空間がぐるりとかこんでいます。これは廊下でもあり、縁側でもあり、昼の生活用の欠かせない活動の場だったので

す。実はこれがエコなんです。ここを、雨戸のような板戸でふさぐと、空気の断熱層ができ、中の寝室や居間の寒さを防いでくれるのです。

今では縁側廊下のある家も少なくなりましたが、縁側廊下は昔からのエコの工夫なのです。





「僕たちのまちづくり」福川裕一、青山邦彦。(1999) 岩波書店より

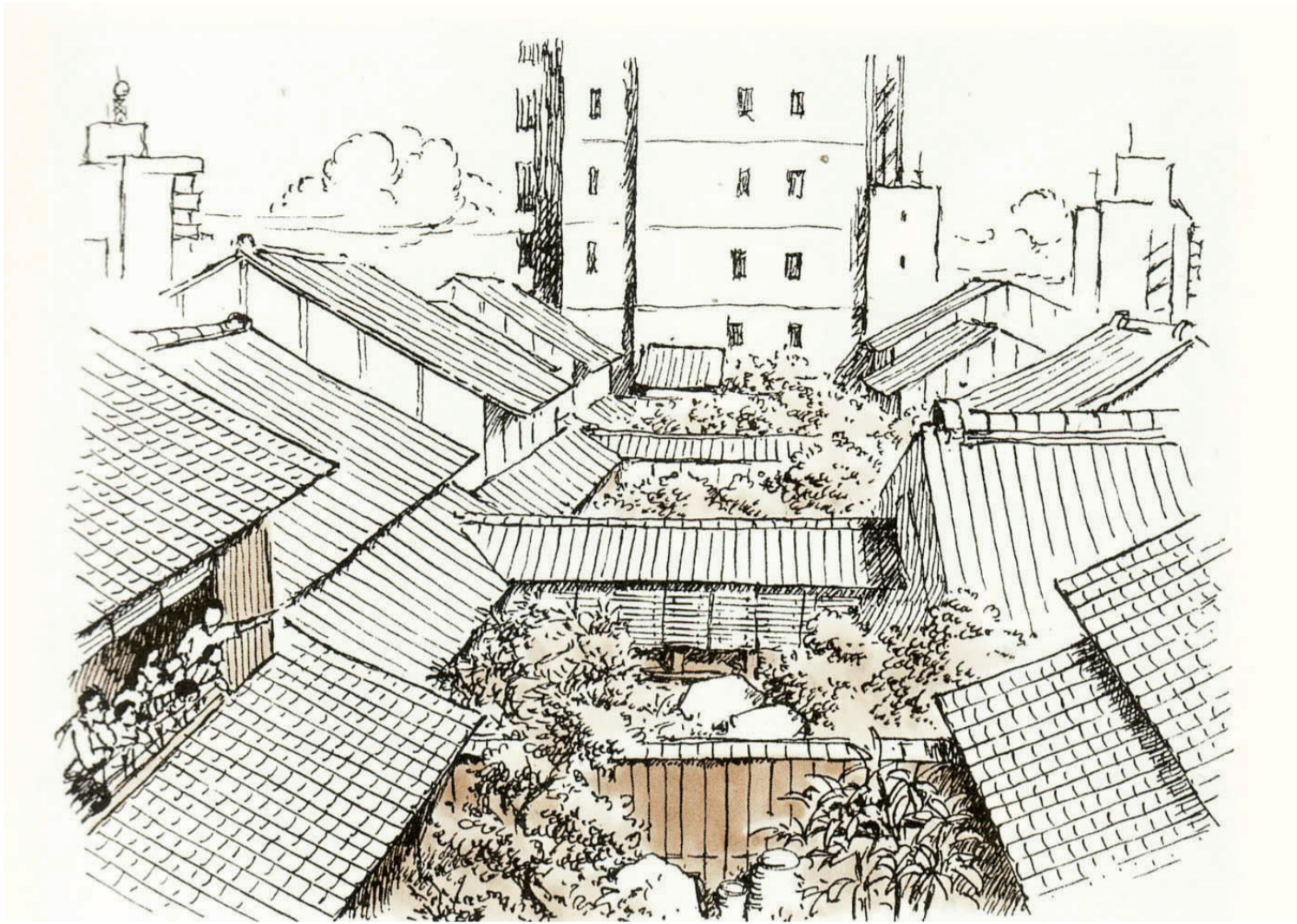
みなさんは、京都の旅館や、田舎のおじいちゃんおばあちゃんの古い大きな家に行った時、こんな絵のような部屋に、はいった事がありますか？

床の間があって、<sup>か</sup> 掛け軸が<sup>しく</sup>かかっていたり、花がかざってあるところがついた日本間。これは、奥の間といいます。

昔は、といっても明治や大正時代のころですが、奥の間は住まいの一番奥にある一番いい部屋でした。広い縁側と、その前には、小さな坪庭。夏に、障子をあけはなつと、風が坪庭から流れてきます。これが、昔のエコなのです。庭の温度が低いので、へやに風が流れこんでくるのです。

つまり自然の冷房です。つまり一昔前には、冬にも夏にも自然の涼しさ、あたたかさを利用した住まいだったのです。





「僕たちのまちづくり」福川裕一、青山邦彦。(1999) 岩波書店より

江戸時代の京都の町家（都心部のすまい）は細長く、横並びの長屋という変わった形をしていました。これも実はエコなんですよ。

この「うなぎの寝床（＝細長い家のこと）」みたいな家には、ちょうど真ん中くらいに、小さな庭があります。これが、町家のエコなんです。この中庭が横連なりになっているから、庭にそって風が流れていくのです。そこに、縁側があって、暑い日はそこで夕涼み、寒い冬には、ひなたぼっこ。つまり、内側から見れば縁側は空気の断熱になって、寒さをふせぎ、外側からは、風のながれを作って、夏の涼しさをつくっているのです。こうしてみると、先に説明した、1500年の昔の家の間取りは、縁側廊下に変形し生きています。夏を涼しく、冬をあたたかくという住まいの理想を、自然の力を利用して、工夫に工夫をこらして実現している、日本の住まいのエコの原型なのです。

鎌倉時代末期のころ、吉田兼好という歌人が書いた徒然草という随筆集のなかに、こんな言葉がでてきます。「家のつくりやうは、夏をむねとすべし。……暑き比わろき住居は、堪へ難き事なり」（＝家をつくるときには、夏の住みやすさを優先してつくるのが良い。暑い家は堪え難く住みにくい）と。現代は夏の蒸し暑さも、エアコンがあるので、もう忘れ去ってしまっていますが、日本の家の知恵をもっと利用すれば、実はエコで、かえって、おもむきのある住まいになるのではないのでしょうか？